

ま え が き

「高校教育研究」第13号を刊行するに当り一言所感を申し述べておきたいと思う。

高校教育の研究が年と共に盛んになりつつあることは誠によろこびに絶えない所であるが、今日位高校教育を正常に実施してゆくに当って大きな困難を感じずる時はないように思われる。それは進学と就職との圧力が日と共に強くなり、この為に高校教育は大きくゆり動かされ勝であるからである。

本校と雖もこの渦中から逃れることの出来ない現実であるが、然しながらわれわれは出来得る限り高校教育を正常な姿におき生徒達の学校生活全体を通して、望ましい人間形成の為に日夜努力しているのである。

本号に集録されている研究の結果はその努力の一端を示しているものであって、個人の各教科の研究は言う迄もなく、研究部や補導部のとりあげている課題は今日必要にせまられている重要な問題である。

研究部の「中学校・高等学校を通じての学業成績の変化について」(続)は継続研究で、文部省の科学研究費の補助を得て行なったものである。補導部の「問題生徒の発見とその指導——早期発見と継続観察」は敗戦後我が国の青年層に多発している精神障害者又はその傾向にある者を早期に発見し、之に適切な指導を加えんとする本校の新しい試みの結果である。然しこれは数年前から着手したもので今後の成果に期待をかけているのである。

本校のささやかな研究の結果が多少なりとも、今日の高校教育の上に役立つならば望外のよろこびである。幸いに関係各方面の方々の御叱正と御教示がいただけるならば誠に幸である。

昭和三十七年二月八日

校 長 村 上 賢 三